

中央大学大学院経済学研究科 News

10/1 に修士論文中間報告会が行われました！

**張り詰めた空気が漂う中、報告者・先生・M1生
共に刺激を受け合い充実した時間だったようです。
司会を務めた2人からの報告です。**

■2016年度修士論文中間報告会後記■

博士後期課程3年
中尾 将人

10月1日に行われた修士論文中間報告会は経済研究科では初めての試みであったが、多くの修士課程の院生が現段階での修士論文の構想や研究結果を報告した。私が司会を担当したセッションでは、中国の産業に関する研究や中国の為替政策に関する研究といった国際経済学の分野、所得税や固定資産税等の様々な税制に関する研究や給与所得控除に関する研究といった財政学の分野、そして人口移動モデルに関する研究といった統計学の分野のように、様々な分野の報告が行われた。多くの先生方や院生の出席者を前にした報告は初めてに近いであろう報告者からは緊張感が伝わり、普段の講義やゼミとは異なる刺激があったことだと思う。

各報告者に対して先生方から豊富なコメントやアドバイスが寄せられた。新たにデータを取得するためにチェックすべきレポートの示唆や、独自の結果を得るための計量手法の示唆をはじめとするアドバイスは是非とも各自の論文に上手く反映してほしい。また、数人の報告者に対するコメントで共通するものはテーマの大きさやタイトルと内容のミスマッチであった。テーマの大きさに関しては、内容を絞って考察するということが意外と難しく、論文執筆にまだ慣れていない修士課程の院生にとっては時間がかかるかもしれないが、まだ十分修正できる時間

はあるのでしっかりと取り組んでほしい。これらのコメントやアドバイスはどれもより良い修士論文を完成させるために必要なものである。中間報告会という良いタイミングで得られた指摘をもとに、報告者がより良い修士論文を完成させることを願う。

この修士論文中間報告会は報告者にとって非常に良い機会であったことだと思うが、来年度に修士論文を提出する予定の院生にとっても非常に良い機会であったと思う。この緊張感が伝わる報告会を経験し、早い段階でより良い修士論文を書くことを意識することとなったであろう。報告者に対するコメントやアドバイスは報告者のものだけでなく、参加した院生にとっても非常に重要なものである。来年度に執筆する際には是非とも意識してほしい。

経済学研究科では初めての試みとなった中間報告会であるが、今年度の修士論文執筆者だけでなく、来年度以降の院生にとっても有益となるという点において、中間報告会の継続は非常に質の高い修士論文を生み出すことにつながるだろう。中間報告会による経済学研究科における研究活動のさらなる活発化を期待したい。



(修士論文中間報告会の様子)

■修士論文中間報告会を終えて■

博士課程後期課程 2年
堀川 祐里

大学院に、そわそわと落ち着かず、同時に息の詰まるような空気が流れる季節がやってきました。修士論文の提出を約3ヵ月後に控え、後輩たちは日々研究室で頭を悩ませています。

去る10月1日、経済学研究科において初めての修士論文中間報告会が行われました。14人の修論生が2つの教室にわかれての報告会でしたが、会場には先生方と、報告者たちのほか、来年のためにと熱心に足を運んだM1も集まって、ピンと張りつめた時間が流れました。

報告会は、1人につき、報告が10分間、質疑応答が10分間の計20分間で、7人の報告者が次々と報告していきました。報告者は、パワーポイントやレジュメを用いてわかりやすい報告を行うことが求められており、主に以下の内容を報告するように指定されていました。1つ目に、修論のテーマ選びの理由、目的について、2つ目に論文の概要と論文構成・分析方法、3つ目に参考文献や資料、4つ目にその他、修士論文に関する事項です。報告者は10分間の報告に、持てる力を一心に注いでいました。

私が司会を担当した教室の報告者の研究分野は、労働問題に関するものと経営学に関するものでした。簡単にご紹介をすると、労働問題に関するものは、①過労死・過労自殺の裁判事例から日本の働き方・働かせ方の変化を明らかにしようとする研究、②中国の大学等卒業生の労働市場のミスマッチの原因を分析し、その対策を考察する研究、③現代日本における就労支援の意義を再検討し、就労困難者への理解や協力が不可欠であることを明らかにする研究、④正社員とパートという雇用形態の違いによる賃金格差を「同一価値労働同一賃金」の視点から検証する研究がありました。

また経営学に関するものは、①中国市場における従来型小売企業と新興電子商取引企業の事業展開の把握から、経営戦略の特徴を明らかにし、小売業への戦略的提言を行おうとする研究、②化粧品の多様化とビューティビジネスの関係を明らかにし、スキンケアをめぐる新しい化粧

2016年10月24日

品戦略について論じる研究、③多角的事業展開を行う私鉄の経営戦略について分析し、鉄道産業の多角化戦略についての示唆を提供しようとする研究が報告されました。



(修士論文中間報告会の様子)

それぞれの報告者は、与えられた10分間という時間でうまく報告をまとめ、そこからは、事前によく報告の練習をし、この報告会に臨んだ様子がみてとれました。

今回の報告会の目的は、修論生があと3ヶ月間により良い修士論文が書けるよう、出来るだけたくさんの先生方からご指摘をいただくことにありました。そのため、質疑応答の10分間では、報告者が応答することよりも、多くの先生方にコメントしていただくことに重きが置かれました。先生方のご発言の順番は、まず「関連分野教員」の2名の先生方、その次に会場に列席された先生方から、最後に指導教授の総括コメントとなりましたが、この質疑応答では、学会報告さながらの、非常に厳しいご指摘も多くありました。

先生方は、報告者の内容に深く入ったご指摘を次々になされ、報告者は真剣にその言葉をメモしながら、一生懸命に考えている様子でした。応答できるご質問には真摯に回答し、難易度の高いものは今後の課題として取り組むという旨を述べていました。

またご指摘は、修士論文一般に通じるものもたくさんありました。例えば、研究における問題意識の明確化、分析方法や資料を適切に選ぶこと、誤字脱字や図表に関する誤りがもたらす悪印象の大きさ、プレゼンテーションにおけるパワーポイントの作り方や話し方についてなど、先生方のご指摘には、修論執筆に必要なエッセ

ンスがたくさん含まれていました。それらは、待機している修論生にはもちろん、会場に集まったM1にとっても貴重なお話であったことと思います。

全体を通して、先生方と修論生のやりとりは緊張感に満ち、傍らで見守るに忍びないシビアなものでした。しかしながら、同じ研究科内で、M1から関係を作ってきた教員と院生間ならではの温かみもあり、先生方は信頼に基づいて厳しいご指摘をなされているのだなと感じられる場面も垣間見ました。

報告会終了後、後輩たちに今回の感想を聞くことが出来ました。そこで、私が興味深く思ったのは、報告者が自身の報告について反省していたこととともに、他の修論生の報告を聞いたことによる学びが多かったと感じていたことです。

自分以外の報告者への先生方のご指摘を聞いて、自身の研究についての課題を発見したり、他の分野においてはどんな議論が展開され、いかなる指摘が入るのかを知ったりと、報告会に参加したことによる修論生の学びは大きなものであったと言えるでしょう。また、M1の院生がたくさん参加しているのを見て、その意識の高さに刺激を受けたという修論生がいるとともに、M1の院生も来年のことを想像して気が引き締まったと話していました。M1の参加が呼びかけられたことにより、互いに刺激を受け合ったということは、とても有意義であったと思います。

司会を仰せつかった当初、私は、今年度から初めて行われる中間報告会の効果はいかなるものだろうかと考えたり、10分間は報告時間として酷ではないかと感じたりしていました。しかし、司会を行いながら思ったことは、人に伝えようとすることで自分の研究で一番明らかにしたいことは何かを考えるようになるし、また時間が短いことによって、言葉を厳選し、贅肉をそぎおとしたスリムなプレゼンテーションが出来るものだという事です。中間報告会の時期は、今後、より効果的な時期に改められることが必要かもしれませんが、この報告会自体は、経済学研究科の修論執筆の過程として非常に重要なものになっていくと感じます。

修論執筆には様々なスキルが詰め込まれています。たくさんの先行研究を渉猟する情報収集能力、知恵を仕入れるためのコミュニケーション能力、Word・Excelをはじめとした情報処理技術、研究対象を緻密に分析する根気、アウトプットするための文章力や表現力、最後までやり抜く持久力など、実に様々です。そのため、この営みは、後期課程に進学し研究者を目指す院生のみならず、社会に出て行く院生にもとても重要なものであると、私は自身の社会人経験から感じています。仕事には、好きだけど苦手なこと、嫌いだけど得意なことなど、やってみないとわからないことが多いものですが、修論執筆は自身をはかる試金石にもなるものだと思います。

この修論執筆において、私が個人的に重要だと考えるのは“失敗すること”です。それは自分の経験を振り返ったとき、これまでの失敗の数々が、現在に活着していると思うからです。しかし、後輩たちのために私がやるべきことは、自分が陥ったような初歩的なミスに陥るように放っておくことではなく、より“高いレベルの失敗”へと導くことだと思っています。そうすれば、修論執筆後に残った“失敗”は、それぞれの院生の次のステップでより高いパフォーマンスをするのに、必ず役に立つものになると思います。

今回の中間報告会は、修論完成までの小さな“失敗”の経験をするために、とても良い機会であったと思います。報告で何故うまく自分の思いを伝えることが出来なかったか、また質疑応答で何故先生方からご指摘をいただくことになったのか、ここを乗り越えることで、きっと次のステップに繋がる修論を完成できるでしょう。

最後になりましたが、教育効果は私にも及び、司会者として報告会に参加した経験は、私自身の学会報告のために大きな学びとなりました。しかしながら初めての司会という大役であったため、報告者の皆様と先生方に多々ご迷惑をお掛け致しましたらうこと、この場をお借りして心より御詫び申し上げます。

修論生の皆様が後悔のない修士論文を書き上げられることを、心より願っております。